

# 一所懸命 恩返し Vol. 2

## 『人を幸せにする権利』

大野 博之

今号も「古賀武夫ブックレット 第四号 『一所懸命 恩返し』」(平成七年一月〜平成十一年六月)から、古賀先生の一九九五年(平成七年)の後半の言葉を辿ります。

この年の後半は映画「人間の翼」の制作・そして上映に邁進します。借金が最大一億五千万円になり、血を吐くような協力のお願ひもしています。そんな時期の文章ですが、努めて明るく語っています。公式な場でよく涙を流していた古賀先生は「感謝」が口癖のように出る年でした。

身体の元気、心の平和  
「実は、人も社会も幸せになるのは簡単なことだ。「知足安分」、今の自分をおるがままに受け入れ、すべてに感謝し、無い物なだりをせず、それぞれに必要な物を必要のために健康が一番。健康だと人にも親切にできる。」

…私の娘が小学校六年生の時、学校である女の子から毎日意地悪をされていたことがあり、娘は学校であつた話を話して、その時、父親である私は娘に「おまえに意地悪する人の事を可哀そうだと思いなさい」と言いました。「えっ？可哀そうなのは意地悪されてる私でしょ」と、よく解らなそうにしていた娘に「幸せな人は人に意地悪をしないものなんだよ。戦争だつて、裁判だつて、けんかだつて、一人占めする人や、やさしく出来ない人、みんな幸せじゃないんだよ。もし、幸せだつたら、そんなことしないからね。だから、お前に意地悪する人はきつと幸せじゃないんだと父ちゃんは思う。そう思うとその子の事を可哀そうだと思えるでしょ。」

彼女はこの話をどう思ったかわかりませんが、それからしばらく彼女から意地悪の話が聞かされてはいませんでした。そんな彼女の卒業間際に学校からお詫びの電話がありました。彼女の靴や学用品が隠されたという事でした。家に帰って来た娘に「辛かつたろう？」というと、「父ちゃん、隠した子にも隠したかつた事情があつたんだよ、私は気にしてないから大丈夫。」と答えました。きつと彼女がそう答えたのは嫌な思いはしたけど、それで不幸せを感じたわけではなかつたことだと思えます。

古賀先生は健康だと人に親切にできるとおっしゃっていますが、幸せだと人に親切にできる、とも言えるのではないのでしょうか。

古賀武夫が映画「人間の翼」にのめりこんだ理由

「今もなお、世界のあちこちで紛争、戦争は絶え間ない。いや、それ以外にも、人類の存亡の為に急を要する地球的問題が山積している。「人間の翼」は五十年前の日本の話ではなく、今日の、そして明日のテーマなのである。私は、石丸進一という一人の青年の生死を通して、戦争と平和、生きる事、家族、地域、民族、祖国、世界、人間を問い直したいと思つてゐる。」

…古賀先生が映画「人間の翼」にこまめに関わることになつたのは、縁によるものであり、逃れられない立場に置かれたところもあるでしょうが、自ら望んでいたということが最大の理由でした。二億円近い資金のうち一億五千万円を借金してでもやつたのは、完済出来ないという使命感とともに、せねばならぬという使命感でした。国際協力と共にする方々、地球市民の会の仲間の中にさえ、「古賀さんの映画は地球市民の会の国際協力事業とは関係ない個人的な活動だ」という人もいました。おそらく外からはそう見えたのでしょう。しかし、古賀先生にとつては国際協力も、国際交流も、地域づくりもそして映画もすべては一つの点に帰結する活動の一つだつたのです。それは「人間の持つべき文明」つまり、地球の癒し方でもした。手段、表現方法はそれぞれ別々のものでも、目指すビジョンは同じだつたという事でした。地球市民運動というわかりにくい運動をわかりやすく伝えられた、それが映画「人間の翼」だつたのでしよう。

人を幸せにする権利  
「あたり前、それは、取る喜びから、与える喜びへと変わっていく事である。生かされてる喜びを身体中に受け入れ、感謝し、人間に与えられた唯一絶対の権利である「人を幸せにする権利」を思う存分行使することに他ならない。」  
…現在、地球市民の会の活動理念を伝えるのに、「勝ち組・負け組という「奪い合う経済」収奪型資本主義」から共助という

「与えあう経済」循環型資本主義へと時代のパラダイムを変化させることで、自分以外の人の幸せ自分の幸せだと感じられる人になろう、そのような人材を育てよう、という言い方をしています。これはまさに「人を幸せにする権利」そのものです。十七年前に古賀先生が語つた理念は古賀先生が亡くなった今も地球市民の中にそのまま残っています。

当時古賀先生は「地球市民の会ではなく地球家族の会にしなければならぬ」ともおっしゃっていました。これは自分以外の人の幸せ自分の幸せだと感じられる関係が一番簡潔に表れるのが家族間においてだから、地球上のすべての生き物が家族になるべきだという意味だつたのでしよう。

うさぎはなぜ亀に敗れたか  
「うさぎの敗因と亀の敗因だが、それは、うさぎの目標が亀に勝つ事だつたのに対して、亀が目指したのは、常に向こうの山に到達することだつた。我々はすべからず、どこに向かつて歩むかを考えるべきである。」

…古賀先生はこのエピソードに以下のようにつけ加えられました。「うさぎは亀が相手だつたから昼寝をしてしまつたのだ。結果的にうさぎが寝たのが亀の勝因だが、亀はうさぎとの勝負の最重要点を山に到達することと考えていた。うさぎも大きな志を持つていれば亀に負けることもなかつた。また、それぐらい志が大きければ、もはや勝負の勝ち負けは関係なくなるものである。」うさぎと亀のお話は「コッコと真面目にやれば最後は勝てる」という教訓だと思われていますが、それだけではない、大きな目標、大きな志を持つことの大切さを学べるのだとおっしゃいました。

古賀先生の長男の慈猛くん、当時小学生、はこの話を聞いた後「お父さん、亀は全然やさしくないよ。もううさぎが寝ていたら起こしてあげなさい。寝ているうさぎこそり行つて勝つてしまつた方が、心が狭いよ」と感想を言いました。「瞬間まつたあと、古賀先生は爆笑し、「亀はうさぎに気が付かなかつたかもよ」といいました。(以下続く)